

ウセルハト墓(TT47)とコンスウエムヘブ墓(KHT02) —エジプト、ネクロポリス・テーベ、アル=コーカ地区、第14次調査—

近藤 二郎 早稲田大学名誉教授

The Tombs of Userhat (TT47) and Khonsuemheb (KHT02): The 14th season of the work at al-Khokha in the Theban Necropolis, Egypt

KONDO, Jiro Professor Emeritus, Waseda University

1. はじめに

2019年12月～2020年1月にかけてアル=コーカ地区の第13次調査を実施したが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、その後、日本からの海外出張が制限を受けるなど2020年度・2021年度において、海外調査を実施することは困難であり、調査を行うことは出来なかった。2022年12月に、3年ぶりにアル=コーカ地区での調査を計画した。エジプト観光考古省により、2022年12月からの発掘申請は承認されたが、内務省によるセキュリティが予定していた調査期間までにはクリアにならなかったために、3年ぶりの現地調査を実施することは出来なかった。

ちなみに、本調査のセキュリティがクリアになったのは、2023年2月中旬になってからのことであった。今回の発掘申請の期間は、2022年11月1日から2023年10月31日の1年間であったため、期限である2023年10月31日迄に最低でも1ヵ月の調査期間を設けることが必要とされた。現在、エジプトでの発掘調査は最低でも1ヵ月以上の調査期間がなければ、エジプト観光考古省から調査を認められないことになっている。

そのため、この期間中に調査を実施することが出来るよう2023年9月下旬から10月末迄に保存修復作業の調査を実施することを計画し、エジプト観光考古省に連絡を入れ、発掘許可書の署名日を決める交渉をしていたところ、観光考古省のハイコミッティーから、我々のルクソール市対岸(西岸)のアル=コーカ地区の2020年度、2021年度の2年間の調査申請に関して、エジプト観光考古省が2年の申請に関して、調査許可を与えていたにもかかわらず、2020年度・2021年度に調査を実施しなかったことを問題視し、2022年11

月～2023年10月の調査を延期するべきであるとの意見が出された。これに対して、この期間、私の所属する大学では専任教員の海外出張が制限されていたため調査を実施することが出来なかったことを説明したところ、それを証明する大学の公式レターの提示をするように要請された。早稲田大学教務部に相談して大学から、新型コロナウイルス感染拡大により、2020年3月27日から、2022年3月18日まで、専任教員の海外出張は認められていなかったという内容の大学名のレターをエジプト観光考古省のハイコミッティーに提示したことで調査延期処置は撤回されて、9月下旬からの調査の再開が許可された。アル=ギーザにあるエジプト観光考古省のオフィスで発掘契約書のサインを行った。近年では調査隊の隊長以外の人物の代理でのサインは許可されておらず、調査隊の隊長本人が契約書にサインを行うことが求められているため、必ず隊長本人が出頭してサインをしなければならない。発掘契約書のコピー、エジプト観光考古省から調査地域である観光考古省のルクソール事務所および西岸クルナ事務所のダイレクター宛のレターを携えてルクソールに向かった。考古事務所に出頭し、調査隊付のインスペクター(査察官)の決定などを手配し、約3年9ヶ月ぶりの調査の再開にこぎつけた。

2. 調査概要

2023年9月23日(土)に3年9ヶ月ぶりに調査を再開した。本調査は、令和5年度、科学研究費・基盤研究(B)研究課題「ネクロポリス・テーベにおける岩窟墓のライフ・ヒストリー的研究」課題番号：20H01352、研究代表者：近藤二郎・早稲田大学名誉教授によって実施された。本第14次調査は、2023年10月25日迄の33日間であった。第14次調査では、

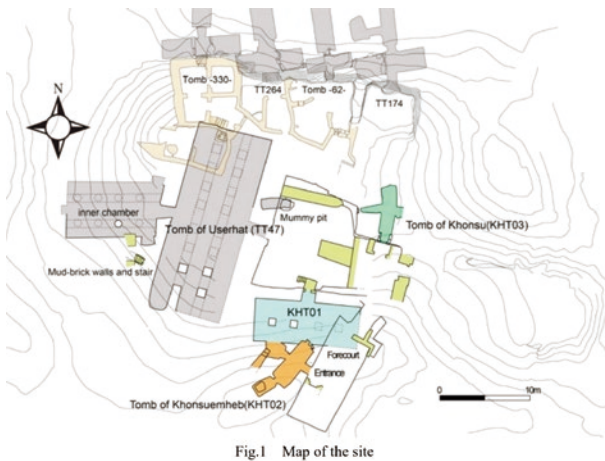


Fig.1 Map of the site

図1 調査地区平面図

主としてメインの新王国第18王朝アメンヘテプ3世(在位：前1390～前1353年頃)の治世末期の高官ウセルハトの墓(TT47)のクリーニング作業とウセルハト墓の前庭部南に位置するコンスウエムヘブ墓(KHT02)の墓内部の彩色壁画の保存修復作業の2カ所に特化したものとなった。

第14次の調査に参加した隊員は、以下の通りになる。

近藤二郎(早稲田大学名誉教授・エジプト学)、前川佳文(東京文化財研究所主任研究員・保存修復学)、進藤瑞生(金沢大学大学院人間社会環境研究科博士後期課程・エジプト考古学)、宮崎滯菜(早稲田大学大学院文学研究科修士課程・エジプト考古学)、柏木裕之(東日本国際大学客員教授・建築史学)、Daniela Maria Murphy(保存修復学)、Stefania Franceschini(保存修復学)、José Ignacio Forcadell Utrilla(岩盤工学)。

3. ウセルハト墓(TT47)入口のクリーニング

ウセルハト墓の入口上部のリンテル(まぐさ石)には大きな亀裂があるため、崩落の危険性があったことから墓入口部分の砂礫の除去作業を実施することは、非常に困難であった。そのためリンテルを支えるために、第13次調査期間中に鉄製のアンクルを組み立て、リンテルの崩落を防ぐ保護工事を開始していた。第14次調査では、鉄製アンクルによるリンテルの保護措置に加えてウセルハト墓(TT47)の入口鉄扉を完成させた(図2)。これによりウセルハト墓入口に厚く堆積していた砂礫の除去作業に着手することが可能となった。砂礫を除去したところ、入口内側の南北壁が初めて姿を見せ、彩色された碑文と被葬者の図像などが明らかになった。特に北側の壁面の保存状況は良好であり、



図2 ウセルハト墓入口鉄扉



図3 ウセルハト墓入口内側北壁

壁面の下部には色彩が鮮やかな装飾帯が残り、その上部には黄色の背景に縦7行の碑文が残されていた。(図3)また、碑文の西側(墓入口から奥)には被葬者であるウセルハトと思われる人物の彩色レリーフ像が描かれていた。人物の顔やその周辺部分は削られた痕跡があり、被葬者の名前とともに故意に破壊されている。人物が着用している衣装の襷など非常に水準の高いレリーフ表現が見られる。

4. コンスウエムヘブ墓(KHT02)壁面修復作業

2020年1月に第13次調査を終了してから約3年9ヶ月が経過していたため、第14次調査では、先ずコンスウエムヘブ墓内部の岩盤や壁面の状況を詳細に観測した。壁画の残る前室内部は岩盤の状況も変化がなく、また第13次調査までに天井や壁面の壁画に施された保存修復箇所は、幸いなことに、ほとんど変化が認められなかった。応急箇所の修復作業を実施し、今後のコンスウエムヘブ墓(KHT02)の保存修復計画について検討した。

5. 出土遺物

第14次調査では、前述したようにウセルハト墓(TT47)入口付近のクリーニングとコンスウエムヘブ墓(KHT02)内部壁面の保存修復作業に集中していたことから、出土遺物の点数は少なかった。主な出土遺物としては、シャブティ像、彩壁画片、カルトナージュ片、葬送用コーンなどであった。

■参考文献

- ・近藤二郎・吉村作治・河合望・高橋寿光・福田莉紗 2021「第13次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報」『エジプト学研究』第27号 18-35頁 日本エジプト学会。